

すれば、このことは、人はいまやその会話の相手に対して非常に慎重でなければならぬ、ということの意味している。現実についての新しい定義と相容れない人々や考え方は、組織的に避けられる。しかしながら、過去の現実の想い出があるということだけをとってみても明らかのように、異質なもの（ヒューマン）なこうした回避が全面的に成功するなどということは稀である。それゆえ、新しい信憑性構造は、普通には（逆行的）な動きを抑えるためにさまざまな治療手続きを設けるであろう。こうした手続きはすでに述べた治療の一般的な型に準拠する。

翻身にとって最も重要な概念上の必要條件は、考え方の変化の全過程を正当化してくれる装置が存在することである。正当化されねばならないのはただ単に新しい現実だけではない。新しい現実が獲得され、維持される諸々の行程、そしてそれ以外のいっさいの現実の放棄と拒否もまた、正当化されねばならないのだ。概念機構がもつ無効的な側面は、解決されねばならない古い現実の取りこわしという問題からみても、とくに重要なものとなる。かつて個人にそれを仲介した集団や意味ある他者と同様、古い現実新しい現実の正当化装置のなかで、再び解釈しなおされなければならぬ。こうした古い現実の再解釈は、個人の主観的履歴書のなかに、（紀元前）と（紀元後）、（ダマスカス以前）と（ダマスカス以後）、といったような断絶をもたらす。翻身に先立つすべての事柄はいまや翻身に通じるものとして（いわば（旧約聖書）として、あるいはまた福音の前ぶれとして）理解され、翻身の後に起こる出来事はすべて新しい現実から流れ出たものとして理解されるのである。これは過去の生活歴全体の再解釈をともなっており、それは（当時私）はこう思っていた。いまではその通りであったことを知っている、という解釈図式にしたがって行なわれる。これはしばしば現在の解釈図式の過去への投射（この場合の定式は

（おぼろげながら当時私はすでにそのことを知っていた）という形をとる）や、過去には主観的には存在しなかつたものの、当時起こつた出来事を再解釈するのにいまや必要となつたさまざまな理由づけ（この場合の定式は「私は当時すでにそのことを、実際には、やっていた。というのも……だからだ」という形をとる）をともなっている。翻身以前の経歴は、典型的には、新しい正装化装置のなかで戦略的地位を占める否定的範疇のもとに包摂されることによつて、全面的に抹消される。たとえば「私がまだ罪多き人生を送つていたころ」、私がまだブルジョワ的意識に捉われていたころ、私がまだこれらの無意識的な神経症的欲求に駆られていたころ」等々といった表現法はその例である。履歴上の断絶は、このようにして暗闇と光明との認知上の区別と同一視されるのである。

しかし、こうした全面的な再解釈が行なわれるだけではまだ十分ではない。ここにはさらに、かつては意味のあつた過去の出来事と人間についての特殊な再解釈が加わらなければならぬ。もし自己変容を行ないつつある個人がこうした出来事や人物の一部を完全に忘れ去ることができたならば、その翻身がうまく成功することはいうまでもない。しかしながら、過去を完全に忘れ去るなどということは至難のわざである。そこで必要になるのが自分の履歴書におけるこうした過去の出来事や人物の意味の根底的な再解釈、という方法である。実際にあつた出来事を忘れるよりも一度もあつたことのない出来事を考え出すことの方が、どちらかといつてより簡単である。そこで人は、記憶にある過去と解釈しなおされた過去との辻褄を合わせることが必要な場合には、いつでもさまざまな出来事をこしらえ上げ、挿入することがある。彼にとつていまやもっぱらそののみが納得できると思われるのは古い現実ではなく新しい現実なのであるから、彼はそうした手続きに完全に「誠実」であることができる——主観的には、

彼は過去について嘘をいっているのではなく、必然的に現在と過去の双方を包摂する真理そのものに過去を調和させるべく努力しているのである。ついでにいつておけば、この点は、歴史的に何度も繰り返されてきた宗教的文書の反証や偽造の背景にある動機を正しく理解しようとする場合には、極めて重要な点になる。このようにして、関係する人びともまた——そしてとくに意味ある他者は——解釈しなおされることになる。かつての意味ある他者は、いまやその意味が必然的に彼らにとっては不透明な、ドラマの不本意な俳優になる。しかもこの俳優たちは、普通はこうした役割指定を拒絶する。しかし、この拒絶は決して驚くべきものではない。予言者たちが通常その生まれ故郷で冷たい眼で眺められるのも、こうした理由からであり、弟子たちに父母を棄てることの必要性を説いたイエスのことばが理解できるのも、こうした文脈においてである。

ところで、部外者の目からするといかに納得しがたいものであろうとも、いまや考えられるなら現在の現実への自己変容にとつて必要なある特定の〈処方箋〉を提示することは、難しいことではない。たとえば人々に対し、彼らが規則正しく生魚を食べつけ、またそれをつづける限りにおいては、他の宇宙から来た生物とも意思疎通することができる、ということを確認させるための特殊な手続きを指示したりすることも可能なのである。もし説者にその気があれば、いろいろと想像をめぐらして、そうした魚食主義者の一派を形成するのに必要な手続きの細目を作成してみるのも一興であろう。そうした〈処方箋〉は完全に外の世界から遮断され、社会化と治療にとつて必要な要員を備えた、魚食主義者の信憑性構造の構築を必要とするであろう。またそれは、なぜ生魚と銀河への感応力との間にある自明の関係がこれまで発見されてきていないかを説明できるだけの、十分に洗練された魚食主義についての知識体

系の樹立を必要とするであろうし、この偉大な真理に向かう個人の旅程に意味をもたせるのに必要とされる正当化装置と無効化装置をも備えていなければならないであろう。もしこれらの手続きが注意深く整えられたならば、個人がいったん魚食主義者の洗脳組織に勧誘されるなり誘惑されるなりした場合には、洗脳が成功する可能性は大きなものとなるであろう。

いうまでもないことだが、実際には、上に述べたような社会化のやりなおしと、第一次的内在化のうゑに成立しつづけている第二次的内在化との間には、多くの中間的なタイプが存在する。こうしたもののなかには、たとえば、主観的現実の部分的変容やその指定部分の変容などが含まれる。そうした部分の変容は、個人の社会的移動や職業訓練との関係上、現代社会ではごくありふれたものとなっている。

ここでは主観的現実の変化はかなりの程度のものでありうる。というのも、現代社会においては、人は世間に受け容れられる上層中産階級型の人間に仕立て上げられたり、同じく世間にそれとして通用する医者に仕立て上げられたりするからであり、しかもそのことを通じて、それぞれにふさわしい現実の追加分を自らのなかに内在化していくからである。しかしながら、こうした自己変容は、普通は社会化のやりなおしなどというものからはほど遠い。それというのも、こうした自己変容は第一次的内在化を基礎にして成立しており、一般的には、個人の主観的履歴書のなかに突発的な断絶が生じることを回避するからである。その結果、これらは主観的現実の初期の要素と後期の要素との間の一貫性の維持、という問題に直面することになる。社会化のやりなおし——これは主観的履歴書を断絶させ、現在を過去に相関させるよりは、むしろ過去の再解釈という形をとる——の場合には、この問題はこうした形ではあらわれない。しかしながら、第二次的社会化が実際には社会化のやりなおしまでには至らなくても、ま

すまずそれに近づいていくような場合には、この問題はよりいっそう深刻なものとなる。社会化をやりなおすということは、前後の首尾一貫性という難問を非常手段を用いて——つまり一貫性の探求を放棄し、現実を新たに構成しなおすことによつて——解決を図ることなのである。

ところで、首尾一貫性を維持するための手続きには、さほど徹底的なものではないにせよ、過去の手なおしという方法も含まれている——これは、こうした場合には通常、かつて意味をもっていた人物や集団との関係が相変わらずつづけている、という事実によつて強要される方法である。こうした人物や集団は現在もなお身近に存在しつづけており、あまりにも突飛な再解釈に対しては異議を申し立てるのが普通である。しかし、これらの人びとや集団に対してもまた、すでに生じてしまった自己の変化がもつともなものであることを納得させる必要がある。たとえば社会移動との関連で起こりつつある変化の場合には、起こつた出来事をすべての関係者に対し、当の個人の全面的変化を仮定することなく、説明してくれる、既成の解釈枠組といったものが存在する。こうして、たとえば上昇移動の過程にある子どもをもつことになつた両親は、子どもの振舞いや態度における一定の変化を、人生における彼の新しい地歩の確保にとつて必要な——おそらくは望ましくさえある——随伴現象として受けとめるであろう。息子のアーウィングは近郊でも評判の医者になつたのだから、彼が自分がユダヤ人であることを表面に出さないようにしなければならなくなつたとしても、それは〈当然のこと〉なのだ、ということ、両親は納得するであろう。彼が周りの人びとと異なつた服装をしたり、異なつたしゃべり方をするのは〈当然〉であり、彼がいまや共和党に投票するのも〈当然〉であり、ウァサール家の娘と結婚したとしても、〈当然〉なのである——そしてまたおそらくは、彼がごく稀にしか両親の家を訪ねなくなつたとしても、

それは当然のことになるであろう。高い上昇移動率をとまなう社会のなかにすでに存在し、その人自身が実際に移動を開始する以前からすでに彼によって内在化もされているそうした解釈枠組は、履歴上の連続性を保証してくれるとともに、首尾一貫性の崩壊が生じたときにも、それを緩和してくれるのである。⁽³⁰⁾

これと同様の過程は、変化がかなり激しいものであっても、その持続期間が一時的なものにすぎないと考えられるような状況の下でも起こりうる——たとえば短期の兵役に就くための訓練や短期の入院治療の場合など。⁽³¹⁾ここでは全面的な社会化のやりなおしとの相違は、とりわけ容易に理解することができる——たとえば職業軍人の訓練や長期入院患者の社会化の場合にみられる出来事と比較してみるとによって、短期の場合、以前の現実との首尾一貫性とアイデンティティ（一般人ないしは健康な人間としての存在）は、自分がやがてはこうした現実やアイデンティティに戻っていくであろうという予測によって、すでに与えられているのである。

大ざっぱに言えば、上に述べた二つの手続きは対立的な性格をもつものということができる。社会化のやりなおしの場合には、現在の現実と合致するような形で過去が解釈しなおされており、それは当時、主観的には存在しなかったさまざまな要素を過去に投射する、という傾向をもっている。これに対し、第二次的社会化の場合には、現在が過去との連続的な関係にあるものとして理解されており、実際に変化があったとしても、それを小さく見積ろうとする傾向がある。ことばをかえれば、社会化をやりなおすための現実的基礎は現在にあるのに対し、第二次的社会化のそれは過去にある、ということだ。

2章 内在化と社会構造

社会化は常にある特定の社会構造の文脈のなかで行なわれる。その内容だけでなく、その〈成功〉の度合も、ともに社会・構造的な条件と社会・構造的な結果とをともなっている。ことばをかえれば、内在化という現象の微視社会学的ないしは社会心理学的な分析は、常にその背景として、そうした現象の構造的側面についての巨視社会学的理解をもっていなければならない、ということである。⁽⁴²⁾

ここで意図されている理論的分析のレベルにおいては、われわれは社会化の内容と社会構造の成り立ちとの間のさまざまな経験的關係について、立ち入った議論を展開することはできない。⁽⁴³⁾しかしながら、社会化の〈成功〉ということもつ社会・構造的な側面については、若干の一般的な観察を行なうことはできよう。〈社会化の成功〉ということばでわれわれが意味するのは、客観的現実と主観的現実（ここにはもちろんアイデンティティも含まれる）との間に高度の調和が確立される、ということである。反対に、〈社会化の不成功〉というのは、客観的現実と主観的現実との間に不調和が存在すること、として理解しなければならぬ。すでにみてきたように、全面的な社会化の成功などということは、人間学的にみて不可能である。一方また、社会化の全面的な不成功というのも、少なくとも極めて稀であり、

それは極端な身体の病気のために最小限の社会化すらうまくいかない個人の場合のみに限られている。それゆえ、われわれの分析は、その極端な両極は経験的には近づき得ない、ある一つの連続線上の諸段階を対象としなければならぬ。そうした分析は、それが社会化を成功させるための諸条件とその結果についてのいくつかの一般的主張を可能にしてくれるだけに、有益なものである。

社会化が最大限に成功しているという例は、ごく単純な分業しか行なわれておらず、知識の配分も最小限にとどまっているような社会においてみられやすい。そうした条件の下での社会化は、社会によってあらかじめ定義され、はっきりと輪郭が描かれた、諸々のアイデンティティを生み出す。ここではどの個人もすべて社会のなかでのその生活にとって必要な、本質的には同一の制度的プログラムによって、とり囲まれている。それゆえ、制度的秩序の全体の力はどの個人にも多かれ少なかれ等しい重さをもつて受けとめられ、客観的現実を内在化させるための強制的な圧力を生み出している。このため、アイデンティティは、それが置かれている客観的現実を完全に表現する、という意味で、極めて明確にその輪郭が描かれることになる。簡単にいえば、どの人もすべて、ほぼ他の人びとからそのような人として想定されている通りの人間なのである。そうした社会においては、アイデンティティは客観的にも主観的にも容易に確認することができる。だれもがだれをもよく知っており、自分が何者であるのかを知っている。騎士や農民は、彼ら自身にとつてと同様、他者にとつても騎士であり、農民なのである。それゆえ、ここにはアイデンティティをめぐる問題は存在しない。へ自分は何者であるのかという問いは、意識にのぼってきそうにもない。というのも、社会的にあらかじめ定められた回答は主観的にも圧倒的に現実性をもっており、すべての意味ある社会的相互作用のなかで一貫して確認されているからである。

しかしながらこのことは、個人がそのアイデンティティに満足している、ということの意味するわけでは決していない。たとえば農民であるということは、おそらくは決して大いに喜ぶべきことではなかったにちがいない。農民であるということは、ありとあらゆる種類の問題、つまり主観的に現実的で、切迫しており、幸福をもたらすなどということとはほど遠い、さまざまな問題をともなっていた。しかしそれは、アイデンティティの問題はともなつてはいなかった。人は哀れむべき農民であつたのであり、おそらくはまた反抗的な農民ですらあつたであらう。しかし、彼は農民であつたのだ。そうした条件の下で育てあげられた人間が、自分たちのことを心理学的な意味での「隠された深層」において考えるなどということとは、およそあり得ないことである。「表層」の自我と「表層下」の自我は、いついかなる瞬間においても意識に現前している主観的現実の領域によつてのみ区別されるにすぎず、自我の「諸層」の永久的な分化によつて区別されるなどということはないのである。たとえば農民はその妻を殴打しているときには一つの役割のなかで自己を理解し、その領主の前に平伏するときには、もう一つの役割のなかで自己を理解する。いずれの場合においても、もう一方の役割は「表層下」に隠れている。つまりそれは農民の意識にはのぼつてはこないのである。しかしながら、いずれの役割も決して「より深層」の自我、ないしは「より現実的」な自我、として考えられてはならない。換言すれば、そうした社会に住む人間は、ただ単に自分がそのようなものとして想定されているところの人間であるばかりでなく、統一され、「層化されていない」状態⁽³⁾で、そうした人間としてあるわけである。

そうした条件の下では、社会化の不成功は——生物学的なものであれ、社会的なものであれ——人生遍歴における偶発事の結果としてのみ生じる。一例をあげるならば、たとえば子どもの第一次的社会化

が社会的に恥とされる身体的欠陥とか社会的定義に基づく汚名とかによって損なわれたりする場合である。⁽⁴⁵⁾不具者と私生児はこうした二つの場合の原型をなしている。その他にもなお、精神的疾患の場合のように、生物学的障害によって社会化が本質的に阻害されるという可能性もある。こうした事例すべて個人的な不幸という性格をもっている。それら是对抗的なアイデンティティや対抗的な現実を制度化するための基礎となるような力をもつてはいない。実際、こうした力をもたないという事実が、そうした人生経験に存在する不幸を測定するための尺度になつているのである。この種の社会においては、個々の不具者や私生児は、彼らに付与される不名譽なアイデンティティに対し、實質的にはなんらの主観的防壁をももち合わせてはいない。彼は意味ある他者や全体としての共同社会にとつてと同様、彼自身にとつても、彼がそのように想定されている通りの人間なのである。もちろん、彼がこうした運命を恨むなり憤るなりして、それに反抗することはあるかも知れない。しかし、彼が恨んだり憤つたりするのは劣等者としてなのである。場合によっては、彼の恨みや憤りは劣等者として社会的に規定された彼のアイデンティティを決定的に認めるものとして作用することさえある。というのも、彼の上位者たちは、定義からして、こうした残酷な感情のうえに立つてゐるからである。客観的現実とは、主観的には彼にとつてよそよそしく、不完全なものとしてあらわれる。しかし、それにもかかわらず、彼は自分の住む社会の客観的現実のなかに拘禁されている。そうした人間の場合、社会化はおそらくは不成功に終わるのであろう。つまり彼が疎遠な世界のなかにでもいるかのような形で事実上、囚われてゐる社会的に定義された現実と、その世界をこくわずしかし反映していない彼自身の主観的現実との間には、大きな不調和が存在することになるであらう。しかしながら、この不調和はなんらの累積的な構造的帰結をもた

らしはしないであろう。というのも、それは、それ自身の制度化された一連の対抗的アイデンティティをもつ対抗的世界へと結晶化できるための社会的基礎を、まったく欠いているからである。社会化が不成功に終わる人間自身は、明確に輪郭づけられた一つのタイプに属する人間として、社会的にあらかじめ定義されている——たとえば不具者、私生児、白痴等々として。それゆえ、ときによって彼自身の意識のなかにこれとは逆の自己現認があらわれることがあったとしても、それらは一般的な幻想以上の何ものかに自らを変える信憑性構造をまったく欠いているのである。

現実とアイデンティティについての対抗的定義の萌芽は、そうした諸個人が社会的に持続しうる集団に結集しだすようになるや否や、ただちにあらわれる。これは知識のより複雑な配分をもたらず変動過程の引き金になる。いまや社会化にしくじった人びとから成るマージナルな集団のなかに、対抗的な現実が客観化され始めるかも知れないのである。もちろん、この時点において、その集団がそれ自身の社会化過程に乗り出すことはいうまでもない。たとえば癩病患者やその子孫たちは社会のなかで汚名をきせられることがある。そうした汚名は肉体的にこの病気に苦しんでいる人びとだけにきせられる場合もあれば、社会的なとり決めによって他の人びとも及ぶ場合もある——たとえば地震の最中に生まれた子どもなど。こうして、人びとは生まれ落ちた瞬間から癩病患者として定義されることになり、この定義は彼らの第一次的社会化に深刻な影響を及ぼすことになる——たとえば子どもたちが狂信的な老婆の保護下に置かれるような場合。というのも、彼女は子どもたちを物理的には生かしておくにしても、共同社会の枠外で生かしておくにすぎず、共同社会の制度的伝統についても、そのごく一部しか伝達してやらないからである。たとえそうして育てられた人びとがかなりの数にのぼったとしても、彼らが彼

ら自身の対抗的社会を形成することのないかぎり、彼らの客観的アイデンティティと主観的アイデンティティは、ともに彼らのためにつくられた共同社会の制度的プログラムにしたがってあらかじめ定義されることになるであろう。彼らは癩病患者になるはずなのであって、それ以外の何者にもなりはしないのである。

しかしながら、規模も大きく、かつまた持続性のある癩病患者のコロニーがあらわれて、それが現実の——そしてまた癩病患者であることの運命の——対抗的定義にとつて必要とされる信憑性構造として機能するようになると、状況は変化し始める。生物学的認定によるものであれ、社会的認定によるものであれ、癩病患者であることは、いまや神によつて選ばれた人間であることを示す特殊なしるしとして認められることになるかも知れないのである。共同社会の現実を完全に内在化することを阻害された人びとは、いまや癩病患者のコロニーの対抗的現実のなかに社会化されうるようになる。つまり、ある一つの社会的世界への社会化の失敗がもう一つの社会的世界への社会化の成功をもたらさう、というわけである。こうした変動過程の初期の段階では、対抗的現実と対抗的アイデンティティの結晶化は、より大きな共同社会の日にふれないところで行なわれる可能性もある。それというのも、この大きな社会は、これらの人びとを相変らず癩病患者以外の何者でもないものとして前もつて定義しつづけ、たえずそうしたものとして現認しつづけるからである。この社会は彼らが〈本当に〉神によつて選ばれた特殊な子どもたちであるのかどうかについては、何も知らない。癩病患者というカテゴリーに入れられた個人は、この時点において自己自身のなかに〈隠された深層〉を発見するのもかも知れない。〈自分は何者であるのか〉という問いは、二つの対立し合う回答——つまり狂信的な老婆の回答（お前は癩病患者

だ」とコロニー自身の社会化担当者の回答（「お前は神の子もだ」——が社会的に得られるという単純な理由によって、可能になる。ところが、個人がその意識のなかで現実と自己自身についてのコロニーの定義に特権的な地位を与えだすようになると、より大きな共同社会における彼の「可視的な」行動と、まったく異なつた何者かとしての彼の「見えざる」自己現認との間には、一つの分裂が生じることになる。換言すれば、個人の自己理解のなかに「外観」と「本当の姿」との間の分裂が生じている。彼はもはや人びとからそのような人として考えられている人間ではなくなっている。彼は癩病患者として行動する——彼は神の子ともである。この例をさらにもう一段おしすすめて、この分裂が癩病患者ではない人びとの共同社会にも知られるようになった場合を考えてみると、共同社会の現実もまた、この変化によつてなんらかの影響を受けるであろうということを理解することは困難ではない。少なくとも見積つても、癩病患者として定義されてきた人びとのアイデンティティを確認することは、もはやかつてのように簡単にはいかなくなるであろう——つまりそのように定義づけられた人間が自己自身をそうした形で現認するかどうかについて、人びとは確信をもてなくなるであろう。一方、大きく見れば、どの人間をとつてみても、そのアイデンティティを確認することは、もはやこれまでのように簡単にはいかなくなるであろう——というのも、もし癩病患者たちが人びとが想定しているところのものであることを拒否することができるとすれば、他の人びとも自分についてのそれを拒否することができるからであり、おそらくは自分自身もまたそれができるからである。こうした過程は、一見したところ、夢物語にすぎないように思えるかも知れない。しかしそれが夢物語でないことは、ヒンズー教の不可触賤民に對し、ハリジャン、つまり「神の子」という名称を付与したガンジーの例によつて、あざやかに示すこ

とができる。

ひとたび社会のなかに知識のより複雑な配分があらわれたすと、意味ある他者たちがさまざまに異なつた客観的現実を個人に媒介することの結果として、社会化がうまくいかないという事態が起こりうる。ことばをかえれば、社会化の失敗は社会化担当者の不統一の結果でもありうる、ということだ。これはさまざまな形をとつてあらわれうる。たとえば、第一次的社会化を担当するすべての意味ある他者が一つの共通した現実を仲介しながらも、かなり異なつた視点からそれを仲介する、といった状況が考えられよう。もちろん、意味ある他者といえども、それぞれが特殊な経歴をもつ特殊な人間であるという単純な理由からしても、彼らがすべて共通の現実に対してある程度異なつた視点をもつていたとしても不思議はない。しかしながら、われわれがここで念頭に置いている結果というのは、意味ある他者との間の相違によつてもたらされるものではあつても、その相違が意味ある他者の個人的な特性に由来するそれではなく、もつぱら社会的類型の違いに由来しているような、そうした場合の結果である。たとえば男性と女性是一个の社会のなかにあつても、かなり異なつた社会的世界のなかにへ住む場合がある。そこで、もし男と女の双方が第一次的社会化で意味ある他者として機能することがあるとすれば、彼らはこうした食い違つた現実を子どもに媒介することになる。しかしながら、これだけならばまだ社会化の失敗という恐れを招くほどのものではない。現実についての男の見方と女の見方とは社会的に承認されておき、この承認もまた、第一次的社会化を通じて子どもに伝えられていくからである。こうして、男児にとつてはあらかじめ定められた男の見方の支配というものがあつて、女児にもまた同様に、あらかじめ定められた女の見方の支配というものがある。子どもは、それが異性の意味ある他者によつて彼に

媒介されてきている程度に依じて、異性のそれに属するものの見方を知り、はするであろうが、それに自己を同一化するということはないであろう。たとえわずかでも知識の配分が行なわれていさえすれば、それは共通の現実についての異なった見方に特定の権限を与えるものである。上の例でいえば、女性のもの見方は男児にとってはなんら支配権をもたないものとして社会的に規定されている。通常、異性の現実が占めるべき〈正当な位置〉についてのこうした定義は子どもによって内在化されており、子どもは彼に指定されてきている現実自らを〈正しく〉同一化するものである。

ところが、もしいくつかの現実定義の間にある種の競合関係が存在し、それらの間での選択可能性を引き起こすような場合には、〈異常事態〉が人生遍歴においても生じうる。というのも、人生にまつわるさまざまな理由によって、子どもが〈誤った選択〉を行なう可能性がありうるからである。たとえば第一次的社会化の決定的な時期に父親が家を留守にし、社会化がもつばら母親と三人の姉によって担われることになったような場合、男児が女性の世界の〈不適当な〉要素を内在化する、ということもありうるであろう。もちろん彼女たちは、小さな少年が、自分は女の世界に住むことを期待されていない、ということを知ることができるよう、彼に〈正しい〉管轄上の定義を仲介してやることもできるかも知れない。しかし、それにもかかわらず、彼が女性の世界に自らを同一化することもありうるのだ。そのことの結果として起こる彼の挙動の〈女らしさ〉は、〈目立つ〉場合もあれば、さほど〈目立たない〉場合もある。しかし、いずれにせよ、社会から指定された彼のアイデンティティと彼の主観的に現実的なアイデンティティの間には、不調和が存在することになるであろう。⁽³⁶⁾

もちろん、そうした〈異常な〉事態に対処すべく、社会がなんらかの治療対策を講じることはいうま

でもない。われわれはここで治療手続きについて述べてきた事柄を再び繰り返す必要はない。ただ強調しておかねばならないのは、治療機制への要求は社会化に失敗することの可能性が構造的なものに起因することが多ければ多いほど増大する、ということである。上の例でいえば、社会化がうまくいった子どもたちは、社会化をへ誤った子どもたちに対し、少なくとも圧力をかけるぐらいのことはするであろう。仲介された現実の諸定義の間に根本的な対立がなく、ただ共通の現実についての見解の相違があるにすぎないような場合には、治療対策が奏功するチャンスは十分にある。

社会化の失敗は、第一次的社会化の時期にさまざまな意味ある他者からひどく内容の食い違った世界を媒介されたことの結果としても起こりうる。知識の配分がますます複雑化するにつれて、矛盾した諸世界に近づくことが可能になり、それらがさまざまに異なった意味ある他者によって第一次的社会化の時期に媒介される、ということがありうるのである。しかし、頻度からすれば、これは上に述べたような状況、つまり一つの共通の世界についての諸見解が社会化担当者間に配分されているような場合と比べると、起こる回数は少ない。というのも、一つの集団として第一次的社会化という仕事を担当するだけの十分な結束力を備えた人びと（たとえば既婚の夫婦）は、自分たちの間にある種の共通の世界をつくり上げてきていることが多いからである。しかしながら、この場合でもやはり社会化の失敗は起こるものであり、しかもまたそれはかなり理論的に興味のあるものである。

たとえば、子どもが両親によって育てられるだけでなく、人種のないしは階級的な下位社会の出である乳母によっても育てられる、というような場合がある。この場合、たとえば両親は子どもにある人種の征服者としての貴族的世界を媒介する。これに対し、乳母は征服されたもう一つの人種の農民の世界

を媒介する。しかも、場合によってはこの二つの媒介行為がまったく異なったことばを用いて行なわれ、子どもはそれらを同時に習得するが、両親と乳母は互いに相手のそれを理解することができない、というようなことさえ起こりうる。こうした場合、両親の世界が定義からして支配権をもつことはもちろんである。子どもは関係者のすべてから、そしてまた自分自身によつても、自分がその両親の集団に属する人間であつて乳母のそれに属する人間ではない、ということを確認されるであろう。しかしながら、やはり二つの現実のそれぞれの管轄権に關して前もつて与えられた定義は、ちょうど先に述べた第一の状況にみられるように、人生経験におけるさまざまな出来事によつて混乱させられることがあるわけである——ただし、いまや社会化の失敗は、個人の主観的な自己理解の永久的な特徴として内在化された翻身の可能性をとまなう、ということを考えに入れなければならないのだが。子どもが潜在的に選びうる選択肢は、いまやより明確な姿をとつてあらわれ、それらは同一の世界についての異なった見解というよりは、むしろ異なった諸々の世界を含むものとなる。もちろん、実際には第一の状況と第二の状況との間にさまざまな段階があることはいうまでもない。

第一次的社会化において著しく矛盾した世界が媒介される時、人は彼によつて真の人生行路の可能性として理解される、輪郭のはつきりしたいくつかのアイデンティティについて選択を迫られる。彼はAという人種によつて理解される人間になることもできれば、Bという人種によつて理解される人間になることもできる。こうした選択は真に隠されていたアイデンティティの可能性があらわれるとき、つまり客観的に存在する諸類型によつては容易に理解しえないアイデンティティの可能性があらわれるとき、生じる。換言すれば、〈公的〉な生き方と〈私的〉な生き方との間に社会的に表面化しない不調和が

生じることがある、ということだ。たとえば両親の目から見た限りでは、子どもはいまや騎士になるための予備段階に向けてせっせと準備を行なっている。ところが、子ども自身は「遊び半分」でこの過程に参加しているにすぎず、「実際には」被征服集団のより高度な宗教的秘儀に入会するつもりで準備をしているのかも知れないのである。しかも両親はこのことには気づいておらず、彼の行為は乳母の下位社会が提供する信憑性構造によって支えられているのである。これと同様の食い違いは、現代社会においても、家庭における社会化過程と同輩集団における社会化過程との間で起こりうる。家庭の側から見れば、子どもは中学を卒業するための準備に余念がない。ところが、同輩集団から見れば、彼は車を盗むことよって勇氣を試すという最初の重大な試練に備えている。こうした状況が内的葛藤と罪悪感を引き起こす可能性をもっているというまでもない。

一度社会化された人間は、おそらくはすべてが潜在的な「自己自身への叛逆者」である。しかしながら、そうした「叛逆」という心のなかの問題は、それがさらにどの「自己」がある特定の瞬間に裏切られたつあるのかという問題——この問題はさまざまに異なった意味ある他者との同一化がさまざまに異なった一般化された他者をも含むようになる、ただちにあらわれる——をとともなうようになる、さらにいつそう複雑なものとなる。たとえば、子どもは宗教的秘儀への参加のために準備しているときにはその両親を裏切っており、騎士になるべく訓練を受けているときにはその乳母を裏切っている。同様に、彼は「真面目な」小学者であることによってその仲間を裏切り、自動車を盗むことによってその両親を裏切る。しかもそれぞれの裏切り行為は、彼が矛盾した二つの世界に自己を同一化してきているかぎりにおいて、「自分自身に対する裏切り」をもともなっている。われわれはすでに翻身についての先

の分析で、彼に与えられているさまざまな選択肢について論じてきた——もつとも、これらの選択肢は、それらが第一次的社会化の過程ですでに内在化されているときには、異なつた主観的現実性をもつということは明らかであろう。したがつて次のように考えておくのが無難である。それは、翻身は、いかなる主観的現実がそうした選択の結果としての葛藤から生じてこようとも、そうした主観的現実にとつては終生の脅威でありつづける——この脅威は第一次的社会化それ自身のなかに翻身の可能性がもち込まれるときには必ず発生する——ということだ。

〈個人主義〉の可能性(つまり相容れない諸々の現実やアイデンティティの間での個人的選択の可能性)は、直接、社会化の失敗の可能性と結びついている。われわれはすでに社会化の失敗は〈自分は何者であるのか〉という問いを引き起こす、ということを主張しておいた。社会化の失敗がこのような形で認識されるようになる社会「構造的な文脈のなかでは、これと同様の問いは、社会化に成功した者にとつても起こってくる。というのも、彼もまた社会化に失敗した人たちのことをあれこれ考えざるを得ないからである。彼は遅かれ早かれこうした〈隠された自我〉をもつ人びとや〈裏切り者〉、あるいはまた相容れないいくつかの世界の間にあつてその鞍替えを行なつた人びと、あるいはそれを行ないつつある人びと、に出会ふであろう。こうして、一種の鏡像効果によつて、そうした問いかけは自己自身にも向けられるようになるであろう。それはまず最初は〈私はかく存在する、しかし神の恩寵のために〉、という定式で回答が与えられるが、最終的にはおそらく〈彼らがかくあるのに、なぜ私がかくあつてならないのか〉、という形をとるであろう。これは〈個人主義的〉な選択というバンドラの箱を開けることを意味しており、それは、究極的には、その人が歩んできたコースが〈正しい〉選択によつて決定されたもの

であつたか、それとも「誤つた」選択によつて決定されたものであつたか、ということとは関係なく、一般化されるようになる。こうして「個人主義者」がある独特の社会的類型に属する人間としてあらわれることになる。つまり、いくつかの可能な世界の間を少なくとも行き来できる力をもつており、選択可能な数多くのアイデンティティが提供してくれる「素材」をもとに、計画的かつ自覚的に自我を築いてきている人びと、としてあらわれるのである。

社会化の不成功をもたらす第三の重要な状況は、第一次的社会化と第二次的社会化との間に食い違ひが生じたときにあらわれる。つまり、第一次的社会化の統一性は維持されていても、第二次的社会化においてこれとは別の現実やアイデンティティが主観的な選択肢としてあらわれる場合である。いうまでもなく、この選択肢は個人が置かれてゐる社会、構造的な文脈によつて制限されている。たとえば彼が騎士になることを望んだとしても、彼の置かれた社会的立場はこうした望みをばかげた野心にしてしまふ。第二次的社会化がかなり分化してきており、社会のなかにおける自己の「本来の居場所」からの主観的離脱が可能になつてゐるにもかかわらず、社会構造が主観的に選ばれたアイデンティティの実現を許可しない、といったような場合には、興味ある事態が発生する。この場合、主観的に選ばれたアイデンティティは、個人の意識のなかでのみその「真の自我」として対象化されるにすぎない幻想的なアイデンティティとなる。人間は常になえられない目的達成の夢をもつ、と考へてよいのかも知れない。こうした特殊な幻想がもつ特異性は、想像のレヴェルにおけるアイデンティティの対象化、ということにあるが、ここで対象化されるアイデンティティは、客観的に指定され、第一次的社会化の過程においてかつて内在化されたそれとは異質のものである。こうした現象の拡大が社会構造のなかに緊張と不安